

ひきこもり学会のシンポジウム報告

－生きづらさを抱える家族の声（1）－

The Reports of HIKIKOMORIGAKKAI Symposium

－ Voices of families facing difficulties in life（1）－

高井 逸史

Itsushi TAKAI

大阪経済大学人間科学部

藤本 文朗

Bunro HUIJIMOTO

滋賀大学名誉教授

<キーワード> ひきこもり ひきこもり学会 家族の声

1. はじめに

1) ひきこもりの推計人数

内閣府は2023年3月31日、2022年度「こども・若者の意識と生活に関する調査」の結果を公表した¹⁾。外出をほとんどしない状態が長期間続くいわゆる「ひきこもり」の人は、15～39歳で2.05%、40～64歳で2.02%おり、全国の数字にあてはめて約146万人と推計されている。ひきこもりになった主な理由の1つとして、およそ5人に1人が「新型コロナウイルスの流行」をあげ、コロナ禍での社会環境の変化が背景にあることをうかがわせる結果となった。また「退職」をひきこもり状態になったきっかけと答えた人の割合が比較的高いことなどから、何等かの社会情勢や社会的要因から、ひきこもりは、誰もがいつからでもなりうる状態像であり、自分や家族とも無関係ではないことが改めて今回の発表で示されたのではないかとKHJ全国ひきこもり家族会連合会（以下、KHJと略する）は言及する²⁾。

いわゆる「ひきこもり」の実態を把握するため、内閣府は「こども・若者の意識と生活に関する調査」を2022年11月10日～25日、全国の10～39歳の男女2万人、40～69歳の男女1万人を対象に郵送法（オンライン回答併用）で実施。10～39歳8,555人、40～69歳5,214人の合計1万3,769人から有効回答を得た。このうち「生産年齢人口」にあたる15歳から64歳までの年齢層では、広い意味で「ひきこもり」と定義している「趣味の用事のときだけ外出する」や「自室からほとんど出ない」などの状態が6か月以上続いている人は、2%余りで、推計でおよそ146万人に上っている。

年齢層別にみると、15歳から39歳の子ども・若者層では、7年前に公表された調査の1.57%から2.05%に、40歳から64歳の中老年層では、4年前に公表された調査の1.45%から2.02%に増加している。就業経験は、15歳～39歳で62.5%、40歳～69歳で90.3%との結果が示された。ひきこもり状態の人の多くは、社会に出

て何等かの就労を経験したのち、ひきこもり状態になっていることが明らかになった。

今回の内閣府調査では、こうした職場環境の要因として、人と仕事のマッチングに問題がある（自分にむいていない、やりたい仕事ではない 自分の才能や特技を生かせない）と考える人が3割（40歳～69歳）から5割（15歳～39歳）に上っていることが明らかになっている。KHJが2022年度に行った実態調査の結果からも、「情報伝達」「仕事上の配慮」「柔軟な働き方」「働きがい、やりがい」などが示されている。「オンラインやテレワークで働きたい」と思っている人も半数近く（47.2%）おり、意欲のある人の就労機会を確保するためには、その人の特性やペース配慮した働き方、得意なことを活かせる仕事内容など、その「人」に合わせた職場環境、仕事づくりを創出していくことが重要としている。

このうち性別では、4年前に公表された40歳から64歳までの調査では男性が4分の3以上を占めていたが、今回の調査では、同じ40歳から64歳まででは、女性が52.3%と半数を上回り、15歳から39歳でも45.1%の結果であった。

2) 増加傾向になる不登校

文部科学省は2023年10月、「2022（令和4）年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を公表した³⁾。小・中学校における不登校児童生徒数は299,048人（前年度244,940人）であり、前年度から54,108人（22.1%）増加し、過去最多となった。不登校の増加は10年連続で、10年前と比較すると小学生は4.9倍、中学生は2.1倍と小学生の増加が著しい。中学校では1クラスに1～2人の不登校生徒がいる計算になる。主な不登校の要因は「無気力、不安」が51.8%（同4.9ポイント増）と最多で、「生活リズムの乱れ、あそび、非行」が11.4%（同0.6ポイント減）となっている。

2. ひきこもり学会の創設

このように不登校数の増加に加え、非正規雇用やブラック企業と労働環境の劣悪化などにより、齋藤環によると将来ひきこもる人は2050年に1000万人（関係者3000万人）になると報告がある（「AERA」2011年8月）。また、生活保護受給のハードルが高いなど、今後ひきこもりの問題は一層大きな社会問題に発展することが予想される。そこでひきこもりなど生きづらさを抱える当事者が憲法の理念（第13条幸福追求権など）に基づき、就労など当事者の社会復帰をゴールとするこれまでの価値観や社会的規範にとらわれず、当事者やその家族が安心して少しでも楽に暮らせる社会をめざすことを目的にひきこもり学会の準備を進めていた。2022年9月、個人が人として尊重され生きやすい社会の実現に向けひきこもり学会を立ち上げた（<https://portpeer.com/gakkai>）。本学会は研究者等が集うこれまでの研究発表を主とする学術学会でなく、ひきこもり経験者、親の会、支援者、社会福祉協議会、研究者など多岐にわたる。ほぼ毎月1回のペースで定例会を対面とオンラインを併用して開催しており、これまで定例会を12回開催した（2023年11月現在）。ひきこもりの子を持つ親（特に母親）は「育て方が悪い」「しつけがなっていない」「甘やかしすぎ」など周囲から責められる。夫も母親がしっかりしないからと、ひきこもりの原因を母親に求める。まさしく性的役割である。さらに母親は自分自身を責め立てる。来る日も来る日ももっと頑張らないといけないという脅迫概念にとらわれ、休む間もなく子どもと向き合う日々が何年も続く。何が正しくて何が間違っているのか分からなくなり、まさしく出口の見えないトンネルの中を進んでいるのと同じである。

こんな状態が何年も続き健全な親子関係を築くことはむずかしいことは周知のことかもしれない。しかし、社会から排除され周囲から孤独を深める母親は自分を犠牲にしてまでも、子のために最善を尽くそう懸命である。もはや母親自身も子と同様に当事者といえよう。そこで、これまでどちらかというタブー視されていた親がしんどいこと、つらいことをしゃべり、親自身ももっとも自分を大切に、自分のために生きることを多くの母親に分かってほしいと思い、シンポジウムを企画した。タイトルは『親でも、しんどいって言える場所がほしかったんよ』。登壇者は母親3名、父親1名、4名は家族会の役員や支援団体の代表を務めている。登壇者であるの発表を中心にまとめた。

3. シンポジウム開催

シンポジウムは2023年10月1日に堺市総合福祉会館で開催した。対面の参加者50名、オンラインが23名、合計73名が参加した。以下、シンポジウムの様子をまとめた。

1) 開会の挨拶：森下博（元大阪健康福祉大学）

- ・ご紹介いただきました。いつも司会だが、開会の挨拶

を久しぶりにします。

- ・丁度2年ほど前の『ひきこもりになっても元気に生きる』。まずは元気になることをテーマにして書かれた本です。もし必要でしたらお買い求めください。
- ・今日は雨がすごく降ると言われていたが、それにしても忙しい中ようこそお越しいただきました。
- ・僕の方からは、去年22年4月にこの本を書いた高井先生や藤本先生、私も含めて大阪経済大学を会場にした『ひきこもっていても元気に生きたい』という当事者をテーマにしたシンポジウムが持たれました。当事者の思いと親との思いのズレがたくさん出された思い出があります。
- ・今日はひきこもり学会になってから初めてのシンポジウムになります。当事者と同様に親の積もった思いをどうするというのがテーマだと思います。
- ・親のしんどいという思いが言えるというのは切実だと思います。
- ・そもそもひきこもりが社会問題化してから30年になりますが、日本ではひきこもり学会がまだできてきていません。ひきこもり問題が30年経っても学会が立ち上がっていないことは恐れを知らないというか。
- ・私たちの手で22年4月に定款を作り、今年1月ホームページも開設しました。お帰りになったらまた見ていただきたい。
- ・それは次から次に色々なことをしているので、またごらんになっていただければ。
- ・この学会を作った時に、小さく生んで大きく作るをスローガンにして、去年私たちの学会は従来の学術学会の形に捕われず、学者以外にも当事者や親、支援者も誰でも参加できる、ひきこもりなど生きづらさを抱えた当事者が、就労などをゴールとせず、個人が人として尊重され生きやすい社会を目指す、を目的としています。
- ・本日は親でもしんどいと言える場所が欲しいというテーマで、今回のシンポジウムに至りました。前に四人の方が登壇していただきますが、これから実にすごい、力作だと思いますが、思いを持ちながらそれぞれの方が努力されていると思います。本日はそういうことをそれぞれに出していただくことを主題にして企画をしています。
- ・齋藤環先生の『ひきこもりの30年を振り返る』という本を読みました。ひきこもりの解決方法を探るだけでは不十分だ。最終的に目指すべきはひきこもりが問題にならない社会を目指すべきと書かれていて、これは注目に値する言葉だと思います、交流会の話題にもしていただければと思います。
- ・限られた時間なので、これで挨拶を終わらせていただけたらと思います。

2) 当事者親の発表

- ①上坂秀樹（シオンの家）さん 図1参照
- ・京都から来ました。

- ・高井先生から一人の親として向きあう話をしてくださいということで、今日の親でもしんどいと言える場所がほしかったというところから少し離れるかもしれませんが。
- ・自己紹介を簡単に。京都市の東山区、不登校ひきこもりを考える親の会をしています。
- ・親の会の紹介。定例会をしたり居場所や訪問活動をしている。自分自身は不登校とひきこもりの子供を持つ親です。
- ・それぞれ7年間不登校ひきこもりをしていました。
- ・お話をすることを四つにまとめました。
- ・親って苦しいよね
- ・親が変われば子供も変わると言われているが本当にそんなことができるのか
- ・そうするためには親はどうしていったらいいか
- ・子供を許せたとき、親自身も許される、解放されると言う感覚が僕自身ありました。
- ・その四つについて話したい。
- ・親の苦しみについて。
- ・突然子供は不登校になったりひきこもりになったりします。学校に行きたくないとか動けなくなるということがある。
- ・それって親としては青天の霹靂、突然に感じる。なぜかよくわからないけどそうなってしまった。戸惑いますね。戸惑いから心配事や不安や怒りなども起きる。
- ・どこか病気になるのか、体が悪いのかとか。病気になったら心が壊れるのかなど。
- ・その次に心配になる。学校に行けるのか、将来どうするのか、結婚できるのかと不安になります。
- ・一方で、特にお父さんが多いのですが、自分はすごく働いているのにいつまでごろごろしているのか腹が立つな、と。子供のために頑張っているのに腹が立つ、という気持ちも親としては実際あります。
- ・そんな不安な中で子供に対応していく。そんな時どんなことがあるか。
- ・とにかく外に連れ出せばどうにかなるんじゃないかとか。
- ・他のみんな頑張ってるのにどうしてお前ができないんだと正論をぶつけることになる。
- ・そうなるかどうかという、三つに分けてみました。
- ・暴力や暴言で反撃する子供もいるし、貝になって口を

- 閉ざす子もいる。他に、自傷行為や、親に迷惑をかけていると自分を責める子もいる。
- 親を苦しめているもの。図2参照
- ・世間の常識。自分自身の価値観。年代によっても違うと思う。高度経済成長で働いてきたモーレツ社員なら、働く、頑張るが当たり前。
- ・子供の将来や不安。このままどうしたらいいのかとか、親がいなくなったらどうしたらいいのかとか。
- ・不登校や登校拒否になった、ひきこもりになった、家族関係がぎくしゃくすること。親を苦しめているのはこの三つかと思う。でもそれは実は子供さん自身も苦しんでいることです。自分自身の将来や価値観も崩壊しているし、自分の背負っている将来への不安は不登校もひきこもりも大きいと思う。それに伴って親子関係もぎくしゃくしているの、とても辛いのかなと思います。
- ・よく言われているが、親が変われば子供も変わる、元気になると言われているが、実際になかなかそれができるかなと思うと、私自身もできなかった。
- ・親が変わるってどういうこと？ と思っていた。
- ・この四つのパターン、おろおろしている、悩んでいる、暴言、自傷行為。
- ・こうしたものを見て、そんなことを言われてもどう変わったらいいのかと思う。自分よりも子供が先に変わった方が楽なんじゃない？ などと思う。親としては子供が変わった方が楽です。常識はずれなことをしているのが子供の方だから、子供が先に変わるんじゃないか、と。親が変わるのは時間がかかるし、皆さん心の底ではこういうことを思っておられるのではないかと思います。自分自身そうでした。
- ・でもなんとかしないといけない気持ちはあるので、親の不安というのも本音なのかなと思う。
- ・次に、変えるということ。子供を変えとか自分が変わるとかって実際にどういうことかというと。エネルギーが要って、誰かを説得して変えようというのはエネルギーがかかるし、実際に自分が変わろうと思った方がちょっと楽かなと思うんですが、自分を変えていくにも結構なエネルギーが要ります。
- ・そこで自分が変わるという点について。これは気が付いたら変わっていたと言う感覚かなと思います。
- ・自分が変わるってどう変わっていくのか。悩み始めた

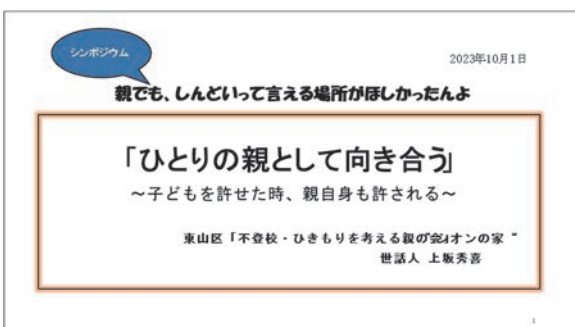


図1 スライド1

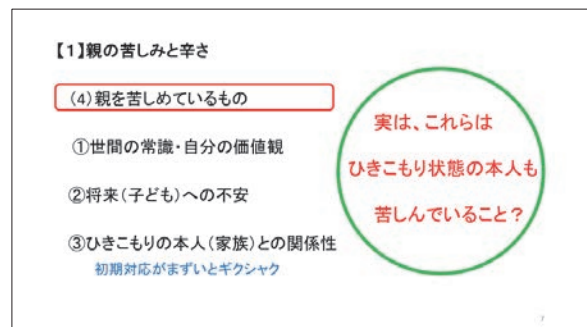


図2 スライド2

時にすでに自分が変わり始めていると思います。自分自身そういう感じでした。

- ・親の会をしていて、お父さんとお母さんと関わって、実は悩み始めているときはスタートなのかなと思う。実感はないかと思うが、僕自身もそうだったし、自信を持ってくださいと思う。
- ・後になって変わってないんだと気づくときは絶対にあります。ただ気づくというのは早く気づけた方が、子供にとっても親にとっても幸せなことだと思います。
- ・どうやって変わるのか。どうやったら変わってしまうのかということについて。二つ上げました。
- ・苦しい思いを吐き出すということです。
- ・相談カウンセリングや親の会などどこでもいいのだけど、相談に行ってください。しゃべらないとか部屋から出ないとか昼夜逆転とかいろいろなことがありますよね。こんなのがいつまで続くのかなど、しんどい思いをどんどん語ってください。語ってもらった時には、受け取ってもらえます。分かってもらえる。自分だけじゃなかったとか受け取ってもらえた時はすごく嬉しかった。一緒に考えてくれる仲間がいたと思えること。情報も手に入る。
- ・少しわかってもらえたところで心に少し余裕ができます。
- ・この三つですね。思いを吐き出す、分かってもらえる、少し元気になる、心に余裕ができる。
- ・心に少しだけできた余裕ということが、親が変わる大事な条件かなと考えています。
- ・もう一つ知っておいてほしいことは、なかなか理解までは行かないかもしれませんが——子供さんの気持ちで、こんなことを言ってる、思ってるんだと言うことを知ってほしいと思います。
- ・ひこもっている子は、すごく自己否定の気持ちを持っています。自分は価値が無い人間なんだとか、消えてしまいたいとか、明日が来なければいいなと思っている人もいました。
- ・子供たちの焦燥感や自己否定の気持ちを、理解まで行かなくても知ってもらえればなと思います。
- ・できることはそんなに親として多くはないのですが、逆に言うと、やれることはシンプルかなと思う。
- ・二つ上げたが、心を支えてあげるといことと、経済的に支える。情報を入れるということもそうだが、前者二つくらいかなと思う。
- ・子供が家にいてもいいんだとか、こもっていてもいいんだという安心感につながるかと思えます。そうすることで、本人が持っている生きる力が回復して動き始めるのかなというのが、親の会や自分が実感していることです。
- ・心理的、経済的に支えるということはどういうことか。家庭が安心できる場所ということです。心理的に休める場所、ゆっくりできる。それができたとき、次の、進路どうするのとかを先取りしない、ということですね。

- ・家庭の中での役割をしっかりと、家事とか。知っている例では、大工さんをしていることなどで、その家に居ていいのだと実感ができることです。
- ・他に、本人の自己決定を尊重できること。その時できることを尊重してあげる。親御さんが気に入らないかもしれない。ごろごろしていたり、YouTubeを見ていたりとか。それもあがる、それを否定しないということでも認めてあげること。やってみたくが少し元気になるれば出てきます。勉強や仕事につながらないとしても支えてあげる、応援してあげることは必要かと思えます。
- ・自分の子をそうだったが、何かをしようとしてしんどくなることもあるので、何もしないことを応援してあげることも必要かなと思います。実際何もしないことはそんなに長く続けられないので何かし始めます、基本的に。
- ・基本的にはそっとしておくこと、耳を傾けることが大事かと思えます。
- ・お金の面で支えるのは当たり前だが、家にいたらお金儲けをできないので、食事や交通費などを出してあげてほしいなと思います。
- ・本人は働けない状態です。一方で申し訳ない気持ちも持っているのでお金のことは言いたくないかと思う。
- ・かといって大金を出せるかということではないので、親のできる範囲で助けてあげる。
- ・実は子供もそんな無理なことを言わないです。無理を言うときは親を試そうとしていること、自分はここにいていいのだろうかを探る意味が多いです。
- ・活動し始めるときはお金は必要になるので、進学などでお金があるときはありますが、支えてあげることです。
- ・やってはいけないことは兵糧攻めのようにお金をあげないことだが、これはほとんど成功しないです。
- ・定期的な小遣いはあげてください、とよく言ってます。親ができる範囲でいいです。ほとんど使いません。それから動き始めた時にその子の力になるのでそうしたお金も大切かなと思います。
- ・登校拒否不登校全国の集いでも、信じて、任せて、待つとよく言われているが、僕自身そんなことをなかなかできないでと最初思っていました。
- ・なかなかできないものですが、裏返して考えてみたほうが伝わりやすいかなと思ひ、本人にしてみたら、信じてもらえて、任せてもらえて、待つてもらえる、そんな風に捉えてもらったほうが分かりやすいかなと思ひます。
- ・本人の自己決定を尊重すること。応援団になってあげるのが大切かと思う。
- ・親本人も苦しみを吐き出すこと。相談機関や親の会はあるけど、吐き出すと少しだけ心のゆとりができます。そうすると本人にも向き合う力が出てきます。
- ・本人に向き合うと実際にとてもしんどいです。そのときどうするかということ、またもう一度親の会や相談機

関で吐き出してください。そのサイクル（三角形）をくると繰り返していると少しずつ優しくなっていきます。本人の人生を認められるようになってきたり。すぐにはできないかもしれないですが、でもこのサイクルはとても大事なと思います。

- ・子供に対して優しくなれる、本人の人生を認めたり許せたり、ということ本人が気づいていくと言うとおかしいけど、そうやっていくと、親自身も、色々な今の価値観からさよならできます。親自身も自分を縛っていたことから解放されていくのかなという感覚が、僕自身にもありました。
- ・子供を許せた時に、親自身も許される感覚、少し楽になる感覚を実感しましたし、親の会でもそういう声を聴くこともあります。
- ・それは親を救ってくれた、親が楽になったという感覚は、とてもうれしいと言うとおかしいが、子供との距離がうまく取れたと言う感覚と似ているのかなと思います。そうすることでお互いを認めていい間隔で付き合えるのかなと思う。
- ・子供からよく言われる『親が変わった』と言われるのは、そういう状態を指して言われるのかなと思います。
- ・親が変わって子供が許せたのか、子供が許せて親が変わったのか順番が分からないですが、僕自身は先に子供が許せてから、自分が許されるような感覚だったかなと思います。
- ・これはいつも話させてもらっているのですが。
- ・ひきこもりになった当事者はこういう感覚ですと言っていました。
- ・図3は心の中の部屋、自分の中の部屋も投影していますが、右は元気で生きていること、外に出ることですね。左は死、消えてしまいたい感覚。両方に扉がついていて、右に引き出そうと無理やりされたら、左に飛び出そうと思っていました、と言われました。部屋の中で消えてしまいたい、何とかしたいという気持ちはずっと抱えてましたと。
- ・それぞれに窓がついていて外が見えるが、外には行きたくないと思っていた。
- ・その時に親御さんが外でずっと待っていてくれた感覚があったからこそ、右側から外に出て行けましたと言われてました。

- ・ひきこもっていることが命をつなげていますと言われていて、ひきこもっていることは悪いことではなく、自分の命を未来につなげていることだと言われていました。
- ・最後に宣伝ですが、居場所に来ている若者が本を書きました。本人への著作料になっています。
- ②浜治弘子（南大阪サポートネット）さん 図4参照
- ・浜治弘子です。
- ・三人の話を聞いて共感とともに素敵な話を聞けたと思います。
- ・初めての方がほとんどかと思ひ、団体概要を載せました。
- ・NPO法人南大阪サポートネット。大阪狭山市にあります。接点が皆様と無いエリアになるかもしれない。
- ・NPOになるにあたり、もともと人権課題をベースに活動していた団体で、14年からひきこもりの課題を取り扱っている団体です。
- ・ステップバイステップと事業名を名付けて、家族会や学びの会、弁当を活動資金にするために作っていたりなどしています。
- ・17年から居場所『TO-VILLA（トビラ）』をもって集まってもらう機会が増えました。コロナが始まったがなんとかしのいでいます。
- ・21年から当事者会がスタートしました。
- ・こういう機会をいただいたのは、私自身も子供が不登校になった経験があるからです。
- ・高校一年の終わりから不登校になり、そのまま退学した経緯。
- ・ベッドの中から動けず、物も食べない状態が続いていた。春休みから少し楽になったのか、ゲームをしに起きてきた。本人と話をして退学を選びました。高校はいつでも行けるし、違うスタイルもあるし、大学に進むこともできる、自由に選択できるので退学するということになりました。
- ・家では力がたまっていくということになって、免許を取りに行く気になって取れた。取ったらアルバイトを親戚の家でしようとなり、行っていたが一年足らずでしんどくなり家にこもることになった。
- ・その二回目の方が本人もしんどかったです。家にも帰ってこず、どこに行ったか分からない、生きているのかも分からない。そのあと家に帰ってきた時

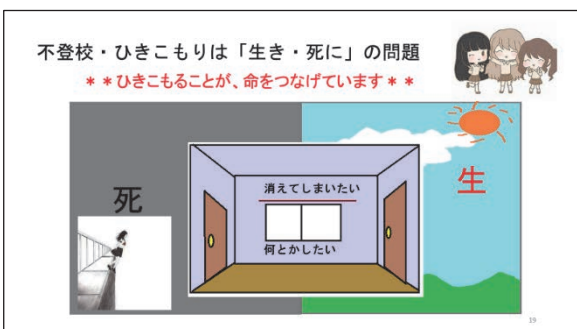


図3 スライド3

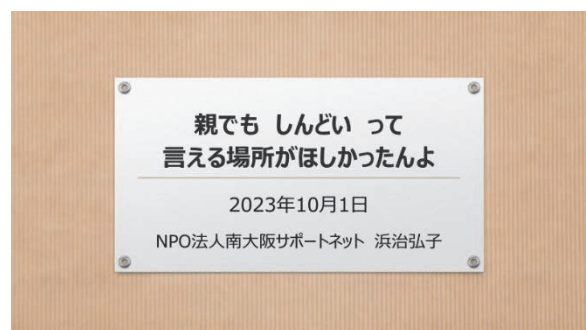


図4 スライド4

に、生きているだけで良いとそのことに感謝を感じて、それまでその言葉を口で言っていたと思うが、それが腹に落ちたと感じた。

- ・それから色々あり、今8年強過ぎて、社会につながりはじめました。
- ・私の自己紹介を。
- ・堺市で生まれ育ち、自転車で走り回っていました。今は大阪狭山市に住んでいます。五人兄弟の長女です。おじいちゃんとおばあちゃんも一緒に、家は商売（会社）をしていて沢山の人に囲まれ、食事も大人数という生活でした。いつも私の役割は弟の面倒を見ることでした。そうなる役に立つ姉として認められました。でもそれは私が世話好きと言うと聞こえがいいが、おせっかいなところで、良いところだと自分は思っているがそういう側面を持っています。だれかがしんどいというとはっとけない。
- ・内弁慶で幼稚園は登園拒否をしていたがスクールバスに乗せられていた。
- ・とは言えわんぱくな女子で、周りは怒るだろうということをやっていた。なんとなくやりたいことがあったらやってしまうところがあり、今の活動をさせてもらえていると思います。
- ・私自身子供がしんどい状態の時に、私自身もしんどいものの、ただその時に何が無いかという点で思ったことは、どちらかという子供が出口に近づこうとしているときにいろいろな情報が欲しかったし、皆さんどうしているのかと困りました。子供に何もしてあげられない状態がすごくしんどかったです。
- ・子供が引きこもる前からNPOの活動をしていたのもあるし、聞いてもらえる方が周りにいたというのもあり、家族会には子供が家にいる間に一度も参加したことがないです。しんどかった部分が違う、共感がほしかった部分が違うということかもしれない。
- ・でも無いものは作ってしまおうと単純に思って、作ってしまった。私だけじゃないはず、他にも困っている人はいると思った。
- ・私は（スライドの）ためらい期と言われる時期に、みんなどうしているのと聞いてもらいたかったし聞きたかった。
- ・このステップでのスモールステップ、薄皮一枚ずつ乗せていけるようなもの、そうした寄り添いがあればいいと思っていましたが無かった。
- ・傷つきを回復するまで、家で好きなことをしていたらいいししていると、本人もやってみたいし今のままじゃ嫌だという気持ちが出てくるタイミングで次どうしようとなっていたのだが。
- ・このとき欲しかったのは親ではない第三者。どこに行ったら色々な人に出会えるのだろうと。私には信頼できる方が周りにいて色々選べたのですが。
- ・現状としては、行政や相談窓口はその年齢を対象にすると就労をゴールにしてしまうというのが現状だと思

う。課題として、他のゴール設定で助けてください、支援してくださいと言うとウチではないとたらいまわしになる状況はあると思います。

- ・就労の前の支援、薄皮を積むようなステップを積みたいということ、居場所やスモールステップの意義への社会の理解が薄いのではと思う。
- ・動き出そうとする子供へのサポートや心配、親にできることは何だろうと。少し動きだしたら、「なんか行ってくれる」と親の気持ちが逸るけど、焦らず騒がず、子供にいろいろな情報を欲しいと言われたときに持っていたいなと思っていた。
- ・そういう時に一緒にいられる仲間や、情報を交換できる仲間がほしかった。
- ・仲間とは何かと言うと、ピアサポートチームを作れたらいいなと思いました。
- ・同じ体験を持つ仲間、お互い様の気持ちでの斜めの関係性を活かして伴走出来たら、そんなチームを作れたかった。
- ・何かしてあげるとかしてほしいではなく、一緒に考えながら支えられるチーム作りが私を作ったものになります。
- ・活動するうえで大事にしていることがあります。
- ・絶対的に自己肯定感が大切だと思っています。ひきこもりだけではなく、生きていく上での幸福感、私の大切な人生を歩むために自己肯定感が大事だと思っています。
- ・本来人は必ず力を持って生まれてきています。
- ・自分もそうだが、子供の力もそうだが、ここに来られている皆さんもそうだが、みんなの力があって素晴らしいなと思います。その中で自分で自分の人生を決めていける力を持っているはずだと思っている。
- ・包摂的な支え合いについて 図5参照
- ・特定の人と括って支援しようということじゃなくて、世の中にはいろいろな人がいます。いろいろな人たちで考えていくことは大事だと思います。
- ・ひきこもりは社会が作る、という講演会をしたことがある。否定される意見も来たが、やっぱり社会が作っていると思います。私もその社会の一員だと。だからみんなで考えることが必要だと思っています。
- ・居場所『トビラ』について。

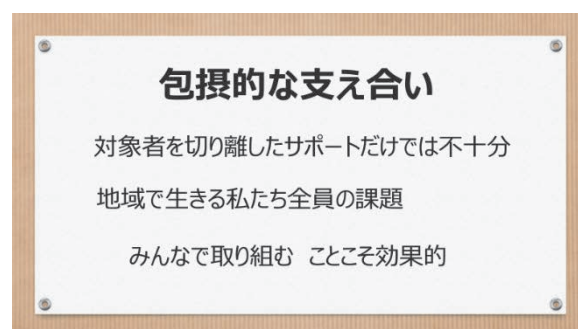


図5 スライド5

- ・お互いに無理のないお互い様の関係で長くゆっくり付き合っていきたいと言っています。今少し余力がある人、力を貸せるという人が、自分ができることをできる時にできる分だけやってみる。いまちょっとしんどいという人は、ちょっと休憩するということが安心して口に出せる関係性を、トビラという居場所を中心に広げていきたいです。
- ・南大阪ですが、近隣で家族会をされている集まりもあり、ともに考えながら、共同で。講演会のチラシや企画を手伝ってもらって進めています。
- ・私たちは情報をどうして流していいかわからず、LINEの公式アカウントを初めてみたがすぐに有料になりどうしようとなっていますが、よろしかったら登録を。
- ・家族も困りびとです。これは私たちもそう思うし、実際にそうです。今日はそういう家族の方々や支援しようと思いを持った方と一緒に学べる機会をいただきました。
- ・短い時間ですがこれで終わります。

4. おわりに

以上、お二人の家族からこれまでの経緯など発表があった。ひきこもりの子を持つ親は「育て方が悪い」など周囲から責められる。来る日も来る日ももっと頑張らないといけないという脅迫概念にとらわれ、休む間もなく子どもと向き合う日々が何年も続く。親子の閉じた関係性からひきこもる以前の親子関係を築くことはむずかしいと思う。そんな中、内にこもるのではなく、外に出て親自身が自分らしく生き生きと活動することがいかに大切か、改めて認識を深めた。

〈ひきこもり学会のホームページ〉

<https://portpeer.com/gakkai>



引用文献

- 1) 内閣府「子ども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）2023年」
- 2) KHJ 全国ひきこもり家族会連合会「ひきこもり」全国推計 146 万人 50 人に 1 人 内閣府調査を受けたKHJの見解, <https://www.khj-h.com/news/statement/8862/>, 2023 年
- 3) 文部科学省「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」2023 年